

絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2020-夏

No.93

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。



薬師本尊 薬師寺 2001年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

新型コロナウイルス禍の中で思うこと

春から世界を震撼させ、恐怖と混乱を招いている新型コロナウイルス感染症は、発生後またたくまに世界に浸潤し、今、パンデミック状態を引き起こしています。

今から百年ほど前の一九一八年、スペインから起り、世界各国に広まった伝染力が強く、死亡率も高かった「スペイン風邪」は人々を恐怖の底に陥れましたが、このたびの新型コロナウイルスも、これに匹敵するか、それ以上とも思われます。

あるS・F作家は、人類が滅亡するとしたら、核戦争によるか、あるいは未知のウイルスによるものか、いずれかだと思ふ、と予言しています。新型コロナウイルスは、この予言を彷彿させます。

当初、中国で極めて質の悪いウイルスによると思われる感染症が発生した、と報じられた時、世界は対岸の火事と決めこんでいた節が見受けられます。しかし、悪魔の炎は見る間に世界を席卷し、今日に至っています。

年の始め、誰がこうした事態を予見したことでしょうか。百年前のスペイン風邪騒動の時と比べれば、医学の進歩には目をみはるものがあります。それでも、治療のための決定打が見出せないことが、なんとも隔靴搔痒の思いです。この稿を記している現在、世界では一千万人以上の人々が感染し、五〇万人余の方々がお亡くなりになったと伝えられております（6月末日現在）。

ここに慎んでお亡くなりになられた方々に哀悼の意

を捧げ、御冥福を御祈念申し上げます。また罹患され治療中の方には一刻も早く御回復することをお祈りすると共に心より御見舞い申し上げます。

私どもの事務局のある上野公園は都内にある桜の名所のひとつとして有名です。今年は暖冬のせい、例年よりもソメイヨシノの開花が早く、三月の半ば過ぎには、もう満開でした。本来ならば花見客で大いに賑わうはずでしたが、当局からの自粛要請もあり、誠に静かな桜の季節となりました。

そればかりか、日本を代表する文化・芸術ゾーンである上野公園にある東京国立博物館、国立西洋美術館、国立科学博物館、東京都美術館、上野の森美術館、東京文化会館、上野動物園等の諸施設は休館・休園を余儀なくされ、忸怩たる思いを強いられました。

新型コロナウイルスは、人の身体ばかりか、文化・芸術の分野をも侵しているわけです。

周知の通り、三月初旬から小・中・高の学校は休校されました。財団事務局の隣にある東京藝術大学も例外ではなく、卒業式、入学式をはじめとして全ての行事は中止、そして休校です。これは関係者のひとりとして、実に寂しいかぎりです。

五月の新緑の頃、上野公園の晴れた日は一年の中で最も快適で美しいときでもあります。そして多くの人々が訪れる季節でもあります。しかし、今年はこちらにいました。話は少しもどりますが、この三月二十日をもって、JRの上野公園口の改札は鶯谷通りに新設され、変わりました。それだけでも見なれたいつもの風



財団理事長
宮廻 正明
(みやまこしまさあき)

景と異なるのですが、眼前にある広場を行く人影は実に疎らで、まるで異次元の世界に飛び込んでしまったかのような錯覚に襲われました。私は学生時代を含めれば、東京藝術大学へは四〇年以上通っています。しかし、今まで昼間、こんなにも静かで人の姿を見ない上野公園を見たのは、初めてです。今後も二度と見ることはないでしょう。と申し上げるよりも、そうであって欲しいと願う次第です。

新型コロナウイルス禍は、私どもの財団にも大きな悪影響を及ぼしております。助成金の申請を審査する事業委員会をはじめ、理事会、評議員会等々、財団の基幹を成す様々な会議を予定通り開くことが出来なくなり、関係諸機関との打合せにも多大な障害が生じたりもしました。

新型コロナウイルス騒動は、いずれ終息するでしょう。その後、世の中がどう動いていくかは、様々な分野において未知の世界であり、近代史において私たちが初めて体験する世界と思われまふ。それは大変厳しいものであることは、容易に想像されます。

新型コロナウイルスの影響で個人・法人を問わず、経済的に極めて困難な状況に直面いたしております。その荒波が財団にも押し寄せてくるであろうことは、これも容易に想像されます。

私たちは一致団結して、この危機に対応する所存、覚悟です。どうか皆様方におかれましても、一層の物心両面における御支援を賜りますようお願い申し上げます。

フィリピン・コルディリエーラの棚田群

(フィリピン共和国)



ユネスコ世界遺産（文化遺産）シリーズ

©NFUJ

フィリピン・ルソン島山岳地域のイフガオ州にある棚田群。この付近では約二〇〇年前から棚田がつくられてきたと言われる。代々稲作を行うことで維持し、発展してきた「文化的景観」の例で、自然環境と人間の暮らしが生み出した見事な調和を見ることができる。

棚田群の二十五〜三十パーセントで耕作が放棄され、棚田の崩壊につながっていると、二〇〇一年に危機遺産に登録されたが、保全の努力が認められ、二〇一二年に危機遺産リストから削除された。

(一九九五年に文化遺産として登録、二〇〇一年に危機遺産として登録、二〇一二年に危機遺産リストから削除)

公益社団法人

日本ユネスコ協会連盟

よみがえる気仙沼

風待ち地区から

東日本大震災において、最も大きな
痛手を受けた地のひとつが宮城県気仙沼市風待ち地区。
今、多くの人々の力と努力によって、
見事な復活を遂げようとしている……。

一般社団法人
気仙沼風待ち復興検討会
代表理事
菅原 千栄
(すがわら・ちえ)



復興が進む内湾地区

三陸リアス
海岸の入り組
んだ気仙沼港
の最奥部に内
湾地区があり
ます。昔から
船出に適した
※ナライの風
(北西風)を
待ったことか
ら、「風待ち」
と呼ばれてい
ます。風待ち
の歴史の中で、
ナライの風が災

いして、大正四(一九一五)年と昭和四(一九二九)
年に大火が発生し、昭和四年の大火では地区のほ
とんどを焼きつくしたといわれています。当時、水産業
の発展により支えられた豊かな経済力を背景に、
全国からの支援によりいち早く復興が進み、伝統
町家建築に加え、和洋折衷やモダンな建物、入港
する船から見えるように屋号(家印)看板を高々と
掲げた商家が建ち並ぶ、独特で魅力ある港町の

✦ 長引く復興 ― 少しずつ進む再建工事 ―

八年間の道のりは容易なものではなく、振り返
ると、震災直後の混乱期では、公費解体が保存か
の決断を迫られていた所有者に寄り添いながら、
文化財の保全を模索。SOCの支援がきっかけと
なり、所有者は、文化財を地域のために役立てた
い、再建し事業を再開したいという前向きな気持
ちに徐々に変わっていき、再建への道筋が見えて
きました。一方で、土地区画整理事業が導入され、
大規模な街区整理が決定。防潮堤問題や街区の盛
土かさ上げ工事、
様々な基盤整備と



角星店舗被災直後



再建された角星店舗

※冬の強い風。三陸から熊野灘に至る海岸で言う。方位は地域により異なる(広辞苑) ※※ Save Our Culture

の調整が長引き、本格的に再建ができるまで時機
を待ち続けなければなりませんでした。
その間、土地区画整理区域外にある魚問屋の小
野健商店土蔵と、昭和四年の大火を免れた大正中
期の陶器店、三事堂さき木店舗の修理に先行着
手(平成二十九年六月までに完成)。
基盤整備の進捗に応じ、文化財や建築の専門家、
技術者の協力を得ながら、角星店舗(平成二十九
年九月完成)、武山米店(平成三十年四月完成)は、
全解体し復原工事を終え、店舗として再開。男山
本店店舗と千田家住宅の再建も進み、いずれも今
年六月末頃完成の予定です。



完成した武山米店



修復を終えた三事堂さき木

✦ 強い建物に修復 ― 千田家住宅 ―



修復を終えた千田家住宅

部材をパズルのように組み合わせて修復していま
す。津波ですべて流されてしまった一階と二階は、
被災前の写真や古写真から設計し直しました。復
原された三階建ての建物は、見えないところに耐
震補強の鉄骨が使われるなどあらゆるところに工
夫がなされています。

千田家住宅は、昭
和五年に建てられた
船舶資材店舗兼住宅。
道路角地に建つ、木
造三階建て。船のイ
メージを漂わせる外
観が美しい。まず道
路からの浸水を防止
するため基礎を高く
し、傷んでいた外壁

を補修しています。また建物をさらに安全にする
ため耐震工事も行っています。修復工事に伴う解
体によって、壁の中や天井裏から今まで見えなかつ
た建築当初の大黒柱や窓枠、ガラス張りの入口意
匠などが見つかりました。近年、千田家住宅の一
階はテナントが入居し、テナントが入れ替わるた
びに内外装を変えた痕跡が積層し、目に見える形
で積み重なった歴史を伝えていることが魅力のひ
とつです。他には、床はいくつかのタイル張りや
土間、板張りが残り、当初柱には複数色のペンキ
塗りが残っていることがわかりました。

✦ 風待ちの風景を未来に…

東日本大震災から九年。国内外からの多大なご
支援や地域の人々に支えられ、専門家や関係者等
のこれまでのご支援ご協力に改めて感謝を申し上
げます。

文化財の再建が進み、再びよみがえろうとして
いる風待ちの風景は、地域の人々の生活や生業の
エネルギーとなり、次の世代へと受け継がれてい
くことを願っています。

気仙沼風待ち復興検討会ホームページ
<http://kazamachi.jp>

筆者略歴

東日本大震災以前から活動していた風待ち研究会のメン
バーで、風待ち地区の歴史的建造物の調査や登録文化財を
活かしたまちづくり活動に参加。
市内の建築会社勤務で、設計や現場監理を担当するかわわ
ら、気仙沼市の文化財保護審議会委員や都市計画審議会委
員を務める。
現在、一般社団法人気仙沼風待ち復興検討会の代表理事。

文化財修理に臨む心

経年による劣化は文化財が避けて通ることのできない宿命。
これを救い、貴重な文化財に新たな命をもたらす修理の重要性を
現場の第一人者が語る。

文化財修理の専門家をめざして

私が所属する「公益財団法人・美術院」は岡倉天心が明治三十一年（一八九八）に創設した「日本美術院」の宝物修理部門が組織の起源です。創設時から現在まで一貫して国庫補助による文化財修理を依頼されており、国宝、重要文化財に指定されている木彫（仏像、神像など）の修理はそのほとんどを手がけ、地方自治体指定や未指定の文化財修理にも積極的に携わっています。

私がこの職場に入所したのは、平成五年、早二十七年が経とうとしています。三十年程前になりますが、実家が寺であったこともあり、六地藏菩薩立像（県指定）を美術院に修理依頼をしてい



写真1 道具や絵具など

た際に父母に同伴して京都にある工房を見学に行く機会がありました。その時に初めてこのような仕事があるのだと知り、深い感銘を受けたのを昨日の事のように思い出します。

祖父が趣味で仏像彫刻をしておりましたが、いつもその姿をみて、彫刻にも興味を抱いておりました。また、小さい頃から工作をしたり、絵を描いたりすることが好きだったこともあり、大学では日本画を専攻しておりました。その経験もこの仕事で活かせることが出来るのではないかと思ったのが、大きなきっかけとなります。

私の現在の主な仕事は、彩色像の修理を担当しています。修理においては現状維持を基本として、作業を行います。その中でも最終的な仕上げ（漆や彩色、など）を任されています。美術院では入所試験（実技、デッサン、美術史筆記）がありますが、晴れて合格し、入所した時より職員は皆、彫刻、漆工、彩色等あらゆることを習得しなければなりません。道具の使い方（彫刻刀や鑿、鉋、鋸）から教わり、刃物の研ぎ、漆の工程など、初めての事ばかりで体力、精神的にへとへと、一日がとても長く感じたものでした。刃物の研ぎは特に時間を要し、砥石に一日中向き合うことも多かったのです。

漆工の養成では、漆で酷くかぶれて、手や顔はかゆみと腫れとの戦いでした（写真1）。



写真2 御玉貫とガラス玉

仏像の修理以外に復元模造の彩色の仕事もあります。今までに鎌倉、平安、天平と様々な時代の復元彩色に携わらせていただきましたが、実際に手を動かす筆を走らせることで、当時の状況を目に浮かべ、仏師たちがどのような思い願いを込めて造りあげたのか想像し、技法、工程や手順を紐解くことで、原本に近づけることができるようになります。それは修理においても同じことです。

また最近では（工芸の分野でもありますが）、ガラス玉の天蓋や沖繩の御玉貫の修理や復元模造などの仕事も手がけています。御玉貫（一雙）というのは、琉球王国時代に尚家の王が祭事の時に使用していたもので、お酒を入れる酒器として作られ、錫瓶の表面がガラス玉（一瓶子三、四〇〇個）を苧麻糸で伸縮性のある編み方で綴ったもので覆われています（写真2）。

修理と復元模造

公益財団法人
美術院国宝修理所
主任技師
高田 明
(たかだ・あき)

真如寺(宝鏡寺)の歴代尼門跡像の修復について

沖繩の海や山、果物といった自然をモチーフにしたかのような、独特な色合いとデザインが特徴的です。復元模造では、ガラス玉の形状や色味、苧麻紐の制作、編み方や工程手順など、試行錯誤しながらの作業でかなりの時間と手先の神経を遣いました。しかし、編み方の手順などが分かった時には、造立時当初の人々が編んでいる光景が目には浮かんでくるようで本当に嬉しかったです。その事も実際に手を動かして編んでみなければ到底分かり得ることではなかったでしょう。

以前、中世日本研究所のモニカ・ペーテ先生の記事にも取り上げられていましたが、真如寺（京都市北区）様所蔵の尼僧像四体を平成二十七年より四年もの長期に渡り修理させていただきました。

この四体は宝鏡寺の歴代尼門跡像（十九世月鏡軒尼、二十世仙寿院宮、二十一世高德院宮、二十二世本覚院宮）になります（本誌第九十号）。真如寺はこれら尼門跡像の菩提寺となります。江戸初期に造像され明治初期と見られる修復以後、修理がなされず傷みが激しく、膠の劣化で矧ぎ目が離れ、崩れてはばらになるような状態でした。修理工程としては、大略、

- 1、現状写真撮影
- 2、クリーニング（写真3）
- 3、彩色剥落止め
- 4、解体
- 5、解体写真（写真4）
- 6、部材掃除
- 7、組み付け
- 8、矧ぎ目処理（※木屑）
- 9、下地塗り（写真5）
- 10、彩色（写真6）
- 11、古色



写真3 クリーニングの模様



写真5 下地塗り



写真4 解体された像



写真6 彩色後

段階においても慎重に作業を進めなければならず、手間と時間を要します。

彫像の命・面相部について

今回の修理では面相部に關しては一步踏み込んだ修理になりました。それは後補の彩色層を除去して新たに彩色を施すという工程でした。どの像も首柄の辺りに当初の彩色と思われる色味が見つかりました。その発見は造像当初の面影が偲ばれ、時間を越えて共有できることで本当に感慨深く嬉しいことです。肌色は白を基本に、いろいろな顔料を混色して作らなければならないので、微妙な分量ですぐ色味が変わります。当初の肌色があればそれに近づけて色味を作ることが出来ます。それはその像の年齢、人柄までも伺えるような温かみのある自然な肌色でそれぞれ違うのです。さらに眉毛や睫毛、アイライン、唇を彩色して彫刻のバランスを見ながら整えていきます（女性のメイクと同じで特に緊張する作業です）。画像なども参考に、時代背景や、生い立ち、人となりを想像して描かなければ当初のお姿には近づけられないと思うのです。

おそらく、その人の業績を美化して、理想化した彫刻であると考えられます。四体の像はシンプルな造形に象徴的な彫刻が施され、同一工房の流れを汲む仏師たちによって作られたのだと推測するのです。

頂相像の多くはほぼ等身大が多いのですが、頭部は挿し首になっており、万が一地震や火災があった際に、頭部だけ

最後に



写真7 修理成った第19世月鏡軒尼像

でも持つて逃げる事ができたためと思われそうです（写真7）。

この文化財修理という仕事に携わらなければならなかったことがたくさんあります。

今このような時代に昔のことを想像することはなかなか難しいかと思いますが、修理や復元模造に携わること、その時代にタイムスリップしているかのような錯覚に陥ることがあります。それは彫刻、漆、彩色どの段階においても同じです。どのような場所でもどんな道具を使っていたのかを想像し、実際に彫刻刀や筆を握ることで、そのモチーフの動きや流れを得られることが多いです。手順や工程などを読み取ることが当時の仏師や絵師、造立時に関わった人々の熱い思いが甦ります。そしてその多くは信仰の対象として大切に修理を繰り返しながら守られているのです。

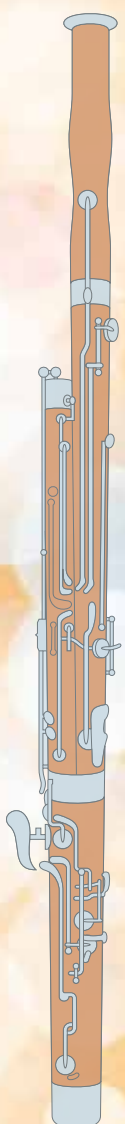
そのようなことを踏まえ、今までに得られた知見などは後世に伝えていくことが大切だと思っ日々仕事に向き合っています。

筆者略歴

高知県生まれ。京都精華大学（日本画専攻）卒業後、美術院を志す。
現在は丹波篠山市に在住。自然が多い環境は高知（天豊）の実家の気候と風土にも似ていて、この仕事を続けていく上での原動力となっている。

※漆塗りの下地の隙間などをうめるのに用いる繊維くずや木粉を漆に練り混ぜたもの（広辞苑）

ファゴットの話



オーケストラの響きに色彩を与えるフルート、オーボエ、クラリネットなどの木管楽器グループの最低音部を受け持つ『ファゴット』。その音は「暗い、目立たない、地味」といった印象。それでも独特のキャラクターを持つその音色は過去の数々の作曲家に愛され重宝されてきた。ファゴットの音色はその不思議なフォルムに秘密が隠されていた！



東京藝術大学
音楽学部准教授
岡本正之
(おかもと まさゆき)

ファゴットの先祖

ファゴットの歴史について、その一族であるダブルリード族の祖先を辿ると、古代エジプトの出土品や壁画、メソポタミアの古墳からの発掘された楽器などにみられるように四〇〇〇年前の昔にまで遡ります。十六世紀にはシヨーム、ランケット、ソルドウン、ドゥルツィアンといった、それぞれの形状の木製の円錐管にダブルリードを発音体とした楽器が使われていました。そのなかでもドゥルツィアン（ドルチェ・甘味な）は一本の楓材に平行した二本の縦穴（下り管と上り管）がつけられ下部でU字状に空気柱が二つ折りにされるように作られています。表裏八個の指坑と二つのキーを持ち細い方の管の上部には金属パイプが付きダブルリードでの発音をします。

ファゴットとドゥルツィアンは長い管を折り曲げ抱き合わせることによって演奏しやすい形状にしている点でも同じことから、ファゴットの先祖はこのドゥルツィアンであると主張する古典楽器研究家もいます（写真1）。



写真1 ドゥルツィアン



写真4 バッソン

と音量と音程のコントロールには難があるようでしたが、その音色には独特の軽さと艶と色香があり、色彩や空気を重んじた印象派の作曲家、ラヴェルやドビュッシーはこのバッソンの音色に、たとえば夜の生暖かい風や悪魔の影などをイメージしていたに違いありません（写真4）。

ストラヴィンスキーのバレエ音楽「春の祭典」冒頭の超高音域でのソロはあまりにも有名です。ストラヴィンスキーはこの革新的な作品の導入にそれまでの誰もが思いつかなかった響きを用いたかったのだらうと思いますが、プレーヤーは当時の楽器では相当な苦勞を強いられただけではと推察します（写真5）。



写真5 エドガー・ドガ作「オペラ座のオーケストラ」。ストラヴィンスキー作曲・バレエ音楽「春の祭典」の冒頭は奏者にとって、やりがいがある……？

ファゴットの構造

ファゴットは木管楽器では最も長い管を持っていますから、分割設計にすることで楽器を分解して持ち運びやすく、そもそも各部を短くすることで楽器を作りやすくなったともいえます（写真6）。



写真6 分解された状態のファゴット

ファゴットの構造で一番の見せ場といっても良いのがこのテナー・ジョイントの膨らみで、この木部の膨らみの中には三本のトーンホールがそれぞれ斜めに開けられているのです。それによって左手の三指に届く範囲に指坑が集められています。そしてこの三・五センチメートルほどもある深いトーンホールにこそファゴットの深く豊かな

ファゴットの誕生

十七世紀末から十八世紀になるとドゥルツィアンと混在しつつ分割式のファゴットが活躍するようになり、ファゴットという名称はイタリア語で「束ねられた木」という意味です。この新型の楽器は文字通り木の管を束ねた形で低音木管楽器の花形はドゥルツィアンからファゴットに推移していったのです。管楽器工房の中にドゥルツィアンとファゴットが共存している様子がわかります（写真2）。



写真2 クリストフ・ヴァイゲルの版画にみる管楽器工房の中



写真3 バロックファゴット

かのアントニオ・ヴィヴァルディはこの新型ファゴットのために協奏曲を三十七曲！（ヴァイオリンには一六五

かな音色の秘密があったのです。その他の部分にも斜めに開けられたトーンホールは数多くあり、この構造はファゴットの特徴として誕生時期から変わっていません（写真7）。

当時よほどの知恵者が名工にしかなし得なかっただろう発想と工作技術に今をもっても舌を巻いてしまいます。



写真7 テナー・ジョイントの膨らみとそのX線写真

ダブルリード楽器ですからリードとの付き合いは避けられません。材料の西洋暖竹はもとは海岸沿いに生える雑草のようなもので、あれこれ手を加えて偶然上手くよいリードに仕上がったとしてもある程度使い込むとへたつてしまします。苦勞して良いリードが出来上がったら練習の五十パーセントは済んだ！ような気になってしまふのはリード楽器奏者のゆえの悲しい性（写真8）。



写真8

「オーケストラがクレッシェンドして（音量を増して）いくと真先に聴こえなくなるのがファゴット、デイミヌエンドして（弱くなって）いくと最後まで聴こえるのもファゴット」という笑い話にならない謂れをしていますし、実際オーケストラで演奏していてフォルテの厚い響きの中でのソロやピアノ・シモ（pp）とても弱く演奏する）などでは苦勞します。でも、一番大切にしたいのはやはり作曲家が望んだであろう響きのイメージ、音楽のキャラクターを想像することです。オーケストラのリハーサルは、まるでお芝居の台

ファゴットとバッソン

その後、金属製のキーやトーンホールの増設を重ねてより機能性を高めながら発達していきました。古典派以降ロマン派の音楽、主にドイツ語圏でのベートーヴェンやメンデルゾーン、シューマンなどの管弦楽中ではファゴットの音色の柔らかさや温かさ深さを活かして、クラリネットや金管楽器の一つであるホルンとのアンサンブルが牧歌的で幻想的な響きを表現する場面などで重宝されています。十九世紀半ば、ワーグナーも頼っていた当時の楽器製作家、ヨハン・アダム・ヘッケルがそれまでの楽器に改良と発明を加味し音量と音色すべてにおいて改善を成功させた、いわゆるヘッケルシステムファゴットを開発したことでドイツ式ファゴットの一つの到達点を築き現代に至っています。

一方フランス語圏では「バッソン（Basson）」という名称で異なる道を進み十九世紀後半、バリサンダー（紫檀）などのもう少し堅めの木材を用いた楽器が発展していきました。バッソンはファゴットに比べ

コンサートで

ライプのコンサートはスリルの連続です。オーケストラのほぼ中央に陣取り、縦方向と横方向にアンテナを張り、脳内にスピードメーター・回転計・ガソリン計。並走しているチェロ軍団に遅れをとってないか？

でも、右手のチーム・ファースト・ヴァイオリンが速いパッセージで走りがちだ！ どうしよう？ しめた！ 独奏体勢だ。でも、ここで息圧一〇〇パーセントかけたとしても次の十三度跳躍急カーブで曲がりきれるか？ 本番中はまるでコクピットに収まったレーサー気分でファゴットを操ります。

アンサンブルやオーケストラの中でのファゴット奏者の役割は常に多岐にわたります。その場面、その場面でも機敏にシフトチェンジすることに醍醐味を感じています。あるときはコントラバスやチェロら低音マフィアの一分家としてオーケストラの黒幕になり、和音楽器としてクラリネットやホルンと共にのどかな田園風景になり、フルートやオーボエ、ヴァイオリンがブリマ・バレリーナが華麗に舞うのを汗を滲ませながら笑顔でリフトするブリモ・バレリーノ、そしてたまには誰の目にも笑うこともなく孤高の唄を高らかに！ でもまわりは可笑しくて笑っている……ような三枚目も演じる。ファゴットは呑気に見えて実はとても大忙しな楽器なのです！

筆者略歴

東京生まれ。一九八九年東京藝術大学音楽学部卒業、同年、東京都交響楽団首席ファゴット奏者に就任。第六回日本管打楽器コンクールファゴット部門第一位、および大賞受賞。二〇〇三年東京オペラシティリサイタルホールにて「B+Cリサイタル」。霧島音楽祭、木曽音楽祭などにも参加。古楽器奏者としてもヘンデルフェステイバルジャパン等に参加。東京藝術大学音楽学部准教授、同大学音楽学部付属高等学校講師。桐朋学園大学特任教授。日本ファゴット（バスーン）協会副会長。

上野の山と寛永寺のあゆみ

東叡山寛永寺
教化部執事
石川亮岳
(いしかわ・りょうかく)

江戸開府以来、上野の山の主として歴史を見守ってきた東叡山寛永寺。時移り、二十一世紀の今も首都の鬼門を守る寛永寺を改めて見る。



東都名所 上野東叡山全図(一立斎広重画)

天海大僧正の活躍

東叡山寛永寺は寛永二年(一六二五)に天海大僧正によって開山されました。当時、天海大僧正の念頭にあったのは京の都と比叡山の関係でした。すなわち比叡山延暦寺が京都御所の鬼門(東北)に置かれ国家の安泰を祈る道場としてあったのを、そのまま江戸に再現しようと考えたのです。そのため江戸城の鬼門に当たる上野とい



四代将軍・徳川家綱公(馬堀喜孝画) 正月のみ公開

う場所に、意図して鎮護国家の祈禱道場を建立しようとしたのです。戦国時代までの上野の山は「忍ヶ丘」と呼ばれ、比較的住民の少ない(開発されていない)土地でした。そして江戸幕府の成立と共に政治の中心が江戸城へと移る中で、上野の山は大名屋敷の建設

歴史の流れの中で……

さて、こうして「寛永」年間にできた「東の(比)叡山」という意味で、「東叡山寛永寺」という山号寺号となりました。この当時、年号(元号)を寺号に冠すには朝廷の許可(勅許)が必要で非常に格式の高いものでありました。そしてこれもまた「延暦」年間に創建された「比叡山延暦寺」に倣うものだったのです。さらに寛永寺の境内は上野の山全域とその周辺に及び、山内各所には京都とその周辺を見立てた諸堂伽藍が立ち並び、最盛期には三十万五千坪という寺域となりました。中でも寛永寺の本堂でもある「根本中堂」は元禄十一年

(二六九八)、現在の上野公園大噴水の場所に建設され、その威容は東都随一の建造物と称賛されたそうで、清水観音堂(京都の清水寺を見立てた懸造りが特徴)や不忍池弁天堂(琵琶湖と中心に浮かぶ竹生島弁才天を勧請)とともに多くの浮世絵の題材となっております。

また幕府との関わりとしては当初の祈禱寺に加え、四代将軍家綱公が埋葬されたことを契機に徳川将軍家の菩提寺も兼ねるようになり、幕末までに六人の将軍が葬られました。

ところで江戸時代の寛永寺住職は、第三世の守澄法親王以降、伝統的に皇室から迎えられました。守澄法親王は天台座主の座に就くだけでなく、明暦二年(一六五五)にはいわゆる「輪王寺宮」の称号の勅賜がありました。さらに歴代の東叡山主は日光山・比叡山の山主を基本的に兼ねたことから、三つのお山を統括したという意味で「三山管領宮」と呼ば



輪王寺門跡第一世・守澄法親王(後水尾天皇第三皇子) 像



15代将軍・徳川慶喜公塾居の間

れ、その宗教的な権威は絶大なものでした。

しかし寛永寺は、ほぼ全域が幕末の上野戦争により大きな被害を受けました。これは、寛永寺に謹慎した徳川十五代将軍・慶喜公の警護を目的に集まった彰義隊が、慶喜公の退去後も上野の山に立てこもったことにより明治新政府軍の攻撃を受けたからです。その結果、根本中堂をはじめとした多くの建物が灰燼に帰しただけでなく、全山が明治政府によって没収されるという困難を迎えました。こうした不遇の時代を経た後、復興の道を歩みはじめた寛永寺は、その途上には太平洋戦争の戦禍による将軍霊廟(位牌所を含む多くの木造建築)の焼失もありましたが、徳川宗家や渋沢栄一、大倉喜八郎両氏の尽力にも支えられ、今日に至っています。

開山四百年を目前にして

さて、現在の寛永寺では初めて寛永寺で葬儀を執行した将軍である三代家光公ほか、埋葬されている六人の将軍など、年に十六回にわたる徳川家の法要を一身住職総出仕で行っています。また七月十二日の盆供施餓鬼会には、当山の檀徒総代である徳川宗家御当主が、一般の檀信徒とともに参列されることも恒例となっています。

明治新政府に没収された境内のほとんども現在は上野恩賜公園に姿を変えておりますが、特に多くの人々が訪れる桜のお花見は、実は天海大僧正が吉野のヤマザクラを植樹し、花見の時期には境内を開放したことがはじまりだったことをご存知の方はそう多くないでしょう。他にも旧根本中堂の傍に竹が植えられていたことから呼ばれた「竹の台」という通称や、寛永寺の惣門であった「黒門」の門前に広がっていたことに由来する「黒門町」など、今でも多く



現在の東叡山寛永寺根本中堂

の名残を感じることができます。江戸時代というのだいぶ昔のことのようにですが、このように上野の山は江戸時代に寛永寺と共に始まり、現在の皆さまが親しんでいる姿へと繋がっています。その歴史と共に寛永寺は、徳川将軍を守護り、また徳川家と一般檀信徒を結びつけ、そして来る二〇二五年の開山四百年に向け、皆さまの心の拠り所となる寺を目指して一歩ずつ歩んでいます。

定款第4条の定めに従い、次の事業を行いました。

令和元年度事業報告

■文化財保存修復助成事業

国内文化財の保存修復助成事業として、26都府県教育委員会から推薦のあった47件の中から、27件について助成を行いました。

(敬称略・以下同)

(美術工芸)

- ① 東京都・栗本重顕
紙本墨画淡彩鍾馗図保存修復事業



紙本墨画淡彩鍾馗図

- ② 福井県・坂井市東荒井区
木造阿弥陀如来坐像保存修理事業
- ③ 静岡県・宝林寺
宝林寺増長尊天菩薩・毘沙門天菩薩保存修理事業
- ④ 三重県・南河路自治会
紙本著色 那智参詣曼荼羅保存修理事業
- ⑤ 奈良県・正福寺
能面(8面)保存修理事業
- ⑥ 愛媛県・小野田部落
木造阿弥陀如来坐像保存修理事業
- ⑦ 高知県・赤岡絵金屏風保存会
「旧赤岡町の土佐芝居絵屏風」保存修理事業
- (建造物)
- ⑧ 宮城県・賀茂神社
賀茂神社本殿保存修復事業

- ② 敦煌研究院より研究員招致(崔 強氏)
令和元年10月1日～令和2年9月30日
(敦煌研究院院長 王 旭東)
- ③ イタリアにおける被災文化財建築の保護に関する研究(名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授 青木孝義)
- ④ 古代遺跡における日乾煉瓦遺構の保存修復方法の確立(公財)中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所研究員 大村正子)

■重点助成事業

(1)熊本地震被災文化財救援・復旧支援事業

熊本地震により被災した文化財の救援と修復のために平成28年度から募金を行い、5年計画の4年目になります。
令和元年度は、熊本県教育委員会から推薦のあった5件に対して助成を行いました。

(美術工芸)

- ① 熊本県・立福寺
木造千手観音立像修復事業
- ② 熊本県・源空寺
木造阿弥陀如来立像災害復旧事業
- ③ 熊本県・鷲林寺
木造愚谷常賢像災害復旧事業



(修復前)



木造愚谷常賢像

(建造物)

- ④ 熊本県・小笠原 崇
熊本藩主細川家家臣小笠原家墓所(常楽寺跡)災害復旧事業

- ⑨ 山形県・鳥海月山両所宮
鳥海月山両所宮随神門保存修復事業



鳥海月山両所宮
鳥海月山両所宮随神門

- ⑩ 福島県・八幡神社
「旧梁川亀岡八幡宮並びに別当寺境域」保存修復事業



八幡神社本殿

- ⑪ 茨城県・無量寿寺
無量寿寺本堂及び鐘楼保存修理事業
- ⑫ 栃木県・日下田正
日下田邸(染色工房併用)保存修理事業
- ⑬ 群馬県・松倉絃洋
薬師堂保存修理事業
- ⑭ 埼玉県・平林寺
平林寺仏殿屋根保存修理事業
- ⑮ 千葉県・玉崎神社
玉崎神社本殿・拜殿保存整備事業
- ⑯ 神奈川県・本禅寺
本禅寺本堂保存修復事業
- ⑰ 石川県・無限庵
無限庵御殿保存修理事業
- ⑱ 山梨県・富岡信也
富岡家住宅保存修復事業

- ⑤ 熊本県・長岡立一郎
熊本藩主細川家一門細川刑部家墓所(慈眼庵跡)災害復旧事業
- (2) 昭憲皇太后大礼服研究修復元支援事業
大聖寺門跡所蔵の昭憲皇太后大礼服は、明治時代の西欧化、社会変化、殖産興業などを表象する大礼服であり、現存する最古の昭憲皇太后所用の第一礼装です。貴重な歴史資料であり、近代日本の象徴的遺産として文化財的価値が高い。経年劣化著しい大礼服の修復、欠失している部分(スカート)の復元のため、令和元年度から令和4年度まで募金を行い、昭憲皇太后大礼服の研究・修復・復元事業を実施します。
- 令和元年度は4年計画の1年目であり、次の助成を行いました。

- ① 昭憲皇太后大礼服研究修復元支援プロジェクト実行委員会
昭憲皇太后大礼服研究修復元支援事業
・トレイン初期調査
・トレイン本格修理(令和元年度分)

(3) サールナート(インド)野生司香雪の仏伝壁画保全支援事業

日本画家・野生司香雪は、昭和7年から11年に5年をかけてインドの聖地サルナートの初転法輪寺で仏伝壁画を完成させました。その仏伝壁画は、今では我が国在外の稀有な近代芸術の文化財であり、また日本・インドのみならず世界の人々との日本芸術を介した文化交流の大切な記念碑となっています。



野生司香雪仏伝壁画(東壁)

- ⑲ 岐阜県・洲原神社
洲原神社本殿保存修理事業

- ⑳ 滋賀県・波爾布神社
波爾布神社本殿保存修理事業

- ㉑ 京都府・千手寺
千手寺 開基堂(旧観音堂)保存修復事業

- ㉒ 鳥取県・奥田東一郎
奥田家住宅保存修理事業

- ㉓ 島根県・有 並河不動産
並河家住宅及び土蔵保存修理事業

- ㉔ 岡山県・高野神社
高野神社本殿保存修理事業

- (有形民俗)
- ㉕ 富山県・八尾町上新町曳山保存会
八尾町祭礼曳山(上新町)保存事業

- (その他)
- ㉖ 岩手県・曹源寺
大般若経典保存修復事業

- (在外研修員)
- ㉗ フォルテピアノ(歴史的ピアノ)修復技術研修、調査

- 芸術研究等助成事業
文化財の保存修復及び芸術に関する調査研究、成果の発表、国際交流事業の実施等に対する助成事業として申請のあった23件の中から、11件の事業に助成を行いました。

- (研究事業)
- ① 建築学生ワークショップ出雲2019(特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ代表理事 平沼孝啓)

- ② 国宝「信貴山縁起絵巻」現状模写研究(東京藝術大学美術学部教授 手塚雄二)
- ③ 「和楽の美」大江戸歌舞絵巻(東京藝術大学音楽学部准教授 味見 純)

- ④ ミュージック・フロム・ジャパン45周年音楽祭(東京音楽大学付属民族音楽研究所研究員 小出稚子)

経ち、経年劣化が進み剥落が激しく保全措置が必要となり、令和元年度から令和2年度まで募金を行い、仏伝壁画の剥落止め、古写真のデジタル化、壁画デジタル撮影等の保全事業を実施します。
令和元年度は2年計画の1年目であり、次の助成を行いました。

- ① 野生司香雪画伯顕彰会
サルナート(インド)野生司香雪仏伝壁画保全支援事業
・壁画保全作業(東壁)

- (4) その他(東日本大震災被災文化財救援・復旧支援事業)

本事業は平成24年度から実施しており、その中で宮城県気仙沼内湾地区国登録文化財等復興事業として6件の店舗等復興事業が行われ、4件は完了済みであります。残りの2件も地盤高上工事が終了したことに伴い復元工事が着工・完了し、次のとおり助成を行いました。

(建造物)

- ① 宮城県・気仙沼風待ち復興検討会
代表理事 菅原千栄
・気仙沼内湾地区国登録文化財等復興事業(男山本店店舗)
・気仙沼内湾地区国登録文化財等復興事業(千田家住宅)

■シンポジウム等の開催事業、その他普及広報活動

文化財の保護及び芸術振興に関する啓蒙活動、国際交流、広報活動として広報誌の発行、文化交流フォーラムの開催、その他普及広報活動に関連し次の事業を行いました。

- ① 広報誌「絲綢之路」の発行
第90号(二〇一九夏)
令和元年6月18日発行
第91号(二〇一九秋)

- ⑤ 唐代建築様式の中央アジアへの波及―碎葉鎮城を中心に―(帝京大学文化財研究所講師 櫛原功二)

- ⑥ オーケストラプロジェクト2019(東京藝術大学音楽学部教授 小鍛治邦隆)

- ⑦ 文化財保存修復を目指す人のための実践コース「工芸」文化財を学び、活用する(特定非営利活動法人文化財保存支援機構理事 増田勝彦)

- ⑧ 仁和寺所蔵 国宝「孔雀明王像」の自然科学的基礎研究(金沢美術工芸大学准教授 荒木恵信)

- ⑨ 「3人の会2019」オーケストラ・トリプティク第八回演奏会(オーケストラ・トリプティク常任指揮者 水戸博之)
- ⑩ 東京藝大ウィンドオーケストラ フランス公演



東京藝大ウィンドオーケストラ フランス公演

- (研究員招致)
- ⑪ 外国人招致研究者招致2019年10月6日～2019年10月12日パオロ・クレモネー(Paolo Crenonesi)氏(国立文化財機構東京文化財研究所保存科学研究センター修復材料研究室長 早川典子)

■国際協力事業

文化財の保護及び芸術文化に関する国際的な協力・交流、人材養成事業など申請のあった4件の事業の中から、4件の事業に対して助成を行いました。

- ① 敦煌研究院より研究員招致(王 思勝氏)
平成31年4月1日～令和2年3月31日
(敦煌研究院院長 王 旭東)

- 令和元年10月21日発行
第92号(二〇二〇新春)

- 令和2年1月24日発行
発行部数:各2,000部

- 配布先:都道府県教育委員会、美術館・博物館、文化財研究機関、芸術系大学、新聞社、支援者、賛助会員、理事・評議員、その他関係者に配布

② 日中韓文化交流フォーラムの開催

期間:令和元年11月13日(水)～16日(土)
会場:日本 東京都
行事:第15回日中韓文化交流フォーラム
テーマ:「音楽」アジアをつなぐ弦の響き」



日・中・韓の代表団の方々

③ 「第24回妙高夏の芸術学校」の開催

主催:妙高夏の芸術学校実行委員会
共催:(公財)文化財保護・芸術研究助成財団、妙高市、妙高市教育委員会
期間:令和元年7月26日(金)～7月29日(月)
参加者:日本画(16名) 油彩画(11名) 水彩画(13名) 水彩画入門(12名) 小学生(3名)
日帰りワークショップ(22名) 計77名
④ 第70回社会を明るくする運動「犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域の

